2019年度日本ロシア文学会大賞選考理由

委員長　諫早　勇一

昨年12月末時点で2件の推薦があり、その審議のために4月13日に東京大学で選考委員会を開催したが、審議の末、大賞候補者として佐藤昭裕・京都大学名誉教授を推挙することが満場一致で決定された。

佐藤氏の研究対象は、現代ロシア語、現代ポーランド語、古教会スラブ語、中世ロシア文章語と多岐にわたるが、特に古教会スラブ語と中世ロシア文章語のテクスト構造の研究に際立った独創性を見ることができる。

佐藤氏は古教会スラブ語と中世ロシア文章語の動詞のテンス・アスペクト研究を動詞の意味論研究の枠を超えて、この動詞の文法的範疇とテクストのタイプとの関係の分析に発展させた。中世ロシア文章語の「語りのスタイル」の特殊性を古教会スラブ語のそれと比較対照することによって明らかにしたのである。さらに氏は特に「事実叙述」と「コメント」という 2 つのテクストタイプがもたらす統語面の現れの違いの関連性に注目して研究を進めた。この着眼点自体が佐藤氏独自のものである。氏の多くの研究によって今までにほとんど注目されてこなかった中世ロシア文章語の文体研究は新たな局面を迎えたと言ってよい。そして氏は、国際スラヴィスト会議などの国際会議においても研究成果を積極的に公表することに努め、国際的に高い評価を受けている

また佐藤氏のロシア語研究は、「ロシア」という枠にとらわれることなく、「東スラブ語の中のロシア語」、「スラブ語の中のロシア語」、そして「自然言語の一つとしてのロシア語」という言語学者の客観的で純粋に学術的な視点からなされてきた。そして氏は一般化を急ぐことなく、自説に対する異論を想定し忍耐強く丁寧に検証する態度を保つことを忘れない。このような態度は研究者の手本となるべきものである

このように佐藤氏は国際的にもすぐれた研究業績を残しているが、言語学・ロシア語学という分野の性格上、その業績が学会員に広く知られているとはいえない。今回佐藤氏が受賞されることが、言語学・文献学を志す若い研究者にとって大きな励みになることを期待したい。